ふるさとポケットガイドブック

シリーズ❼

北海の狩人 オホーツク文化

ご案内します。どこより素敵なわたしたちのふるさと。

スケールの大きな自然で知られる根釧台地は、その地理的条件、
歴史的役割のうえに独特の文化、情緒をはぐくんできました。
歴史、伝統、そして人情も、実に味わい深い土地柄です。
この魅力を少しずつでもかたちにしたいと、
本シリーズの企画・制作をスタートさせました。
名所を巡りながら、力強く生きる人々の営み、
思いに触れていただくガイドブックです。
地元の方には、もう一度ふるさとに出会い、また好きになるきっかけに、
旅の方には、発見と感動への水先案内人となることを願って。

大地みらい信用金庫
創立100周年記念事業実行委員会

大地みらい基金
設立30周年記念事業実行委員会

国後島を望む根室海峡

～ふるさとの記憶をみらいへつなぐ～

INDEX

もう一つの日本史 …… 03

スペシャルインタビュー
中西進氏が語るオホーツク文化のロマン … 05
文化の渡来　第3のルーツ
極北の精神
個々と全体　象徴としての甕(かめ)
オホーツク文化の地で いまを生きる人へ

北海道の時代区分 …… 07
ここだけの古代
当時、世界では

海上を自由に駆けた海洋民族 …… 09
彼らは、どこから来たのか
南は根室、東は千島列島まで

住まい …… 11
住まいは竪穴、22畳大
動物の骨を積んだ祭祀的空間、骨塚も

漁・猟 …… 13
クジラも狙う海獣狩猟
動物は食料、素材、交易品に
移動に、狩猟に、どんな船を使った?

土器 …… 15
明治には発見されていた
文様にも流行が?

見分けてみよう …… 17

かわいいも、機能性も
石・骨・木を使った道具 …… 19

擦文文化との遭遇
トビニタイ文化誕生 …… 21
オホーツク人の選択
変化したライフスタイル

受容と発信
文化がダイナミックに動き出す …… 23
変えたライフスタイル
道東発、全道に伝わった漁具

そして、彼らはどこへ? …… 25
イオマンテに見られるオホーツク文化のなごり
DNAに刻まれた、アイヌ民族形成へのかかわり
「もう一つの日本列島史」の空白を埋める

学芸員に聞く
オホーツク文化の魅力と価値 …… 27

オホーツク文化の主要遺跡マップ

もう一つの日本史

北海道に人が暮らし始めたのは3万数千年前、
氷河期の後期旧石器文化の頃といわれます。
その後地球は温暖化し、1万3千年前頃には
北海道でも縄文文化の草創期が始まりました。
縄文文化からの日本の歴史区分はよく知られるところです。
しかし、ご存じでしょうか。巧みな航海術で
北からやってきた人々がオホーツク海沿い、
流氷の分布圏だけで花開かせた
特異な文化があったことを。
海獣狩猟を行う勇ましさもあり、
戦いを知らず、自然を敬い、
調和の中で暮らす穏やかさもあった
彼らの姿を追ってみましょう。
遥かな時を超えて、
わたしたちに新しい視座を
与えてくれるかもしれません。

根室市弁天島

オホーツク文化解明の先駆者

写真提供：根室印刷(株)

故 北構（きたかまえ） 保男（やすお） 氏

1918年（大正7）～2020年（令和2）6月5日

根室生まれの北構保男氏は13歳の時、根室市・弁天島でアホウドリの骨製の針入れ（p19）を発見しました。「オホーツク文化」の名称が定着する前の時代、この発見は高く評価され、氏は考古学を志します。戦後は印刷会社を創業、市議を務めながら在野の研究者としてオホーツク文化解明に大きく貢献しました。国内外の研究者と共に発掘調査に取り組み、多くの著作を発表、70歳で母校・國學院大学より博士号を授与されています。一方、自ら発掘したオホーツク人の遺骨を50年以上も供養してきました。2017年には発掘・収集した土器など約13万点を根室市に寄贈、その一部は根室市歴史と自然の資料館に展示されています。先人の足跡を生涯追い続けた氏の探究心と郷土愛に敬意を表し、根室にともされた考古学の灯を大切に守っていきたいと思います。

弁天島貝塚竪穴群にて／2007年（平成19）

中西進氏が語る オホーツク文化の ロマン

1929年、東京生まれ。アジア文化と万葉集の比較研究で知られ万葉集の普及に大きく貢献。大阪女子大学学長、京都市立芸術大学学長等を歴任し、現在、富山県・高志の国文学館館長等。日本学士院賞、大佛次郎賞、読売文学賞、菊池寛賞他を受賞し、2013年文化勲章受章。『中西進万葉論集』(全8巻)等、編著多数。

2019年9月特別講演会「オホーツク文化から日本を見る」(中西進先生講演会実行委員会主催 読売新聞北海道支社共催)で根室市を訪れ、ご講演いただいた国文学者 中西進先生に、本誌発刊にあたり、あらためてオホーツク文化の魅力を伺いました。

文化の渡来 第3のルーツ

わたしはオホーツク文化を、日本をつくった3大文化ルートの一つと捉えています。1つ目は中国中央渡来で大和王朝樹立につながったシルクロード。2つ目は中国北辺、モンゴルの草原を通り新羅経由で東北に渡った、わたしがステップロードと呼ぶルート。そして、3つ目がオホーツク文化です。その始まりとされる5世紀、日本はエポックメーキングな時代でした。精神のカルティベーション※という意味で、オホーツク文化は決してマイナーな文化ではなく、先の2つと対等に日本文化に位置づけられるものです。

※カルティベーション＝耕すこと、育てること。

極北の精神

オホーツク文化の魅力の一つは「極北」(限界を極める)の精神です。オホーツク文化は、中国大陸からアムール川を北上し間宮海峡を南下、流氷の分布域と重なる北海道のオホーツク沿岸で栄えました。この、ある種緊張を感じさせる北を極める姿勢と、浮遊性、移動性が、高い精神性を持つ独自の文化の源でしょう。定住して都市を築く大陸文化に対し、オホーツク人は波に漂い、海上が地上であるかのように活動しました。島国に生きる日本人も、もともとは移動型、海を大地とする民族です。石造りの堅牢な住居ではなく、時とともに朽ちる木造家屋に住み、滅びることも自然のこととして受け入れる。「もののあはれ」の美意識も生まれました。自然界を見ても、日本は世界一多くの渡り鳥が飛来し、飛び立っていく国といわれます。

個々と全体 象徴としての甕(かめ)

オホーツク土器の文様は、わたしの目には装飾ではなく本質の表明と映ります。一つひとつのパーツが波のようにつながり全体を構成しているところに、個と全体のつながり、いまも日本人の心に生きる共同体としての「結(ゆい)」の思想が含まれているのではないでしょうか。大和の火焔土器などはデコラティブ(装飾的)ですが、オホーツク土器には流れを表現した波動的な文様が施されているだけです。彼らの存在の根源が土器にも表現されているのです。ちなみに本州では弥生時代に、土器は神聖性を失い単なる道具となり、装飾は削ぎ落とされました。

牙製婦人像※からは美への意識を感じます。身につけた貫頭衣の体に沿ったラインは、体を覆う役割だけではない、美を意識したものと思えるのです。手も表情豊かです。裁縫や手塩にかけて子育てをする女性の手への尊敬も感じます。

四肢を極端に曲げた埋葬法も独特です。屈葬自体は珍しくありませんが、大地に横たえて手足を折り曲げ、頭には甕を被せています。能舞台の下の甕を連想しました。共鳴体ともいわれますが、甕一つで音響がよくなるとは思えません。能がそもそも死者をめぐるドラマであることを考えれば、この甕は甕棺の象徴です。同様に、死者の頭に被せた甕も象徴的なものであり、屈葬の姿勢は胎児、甕は胎盤、命の源である胎内に戻ることをイメージしたと思われます。

※牙製婦人像＝p19

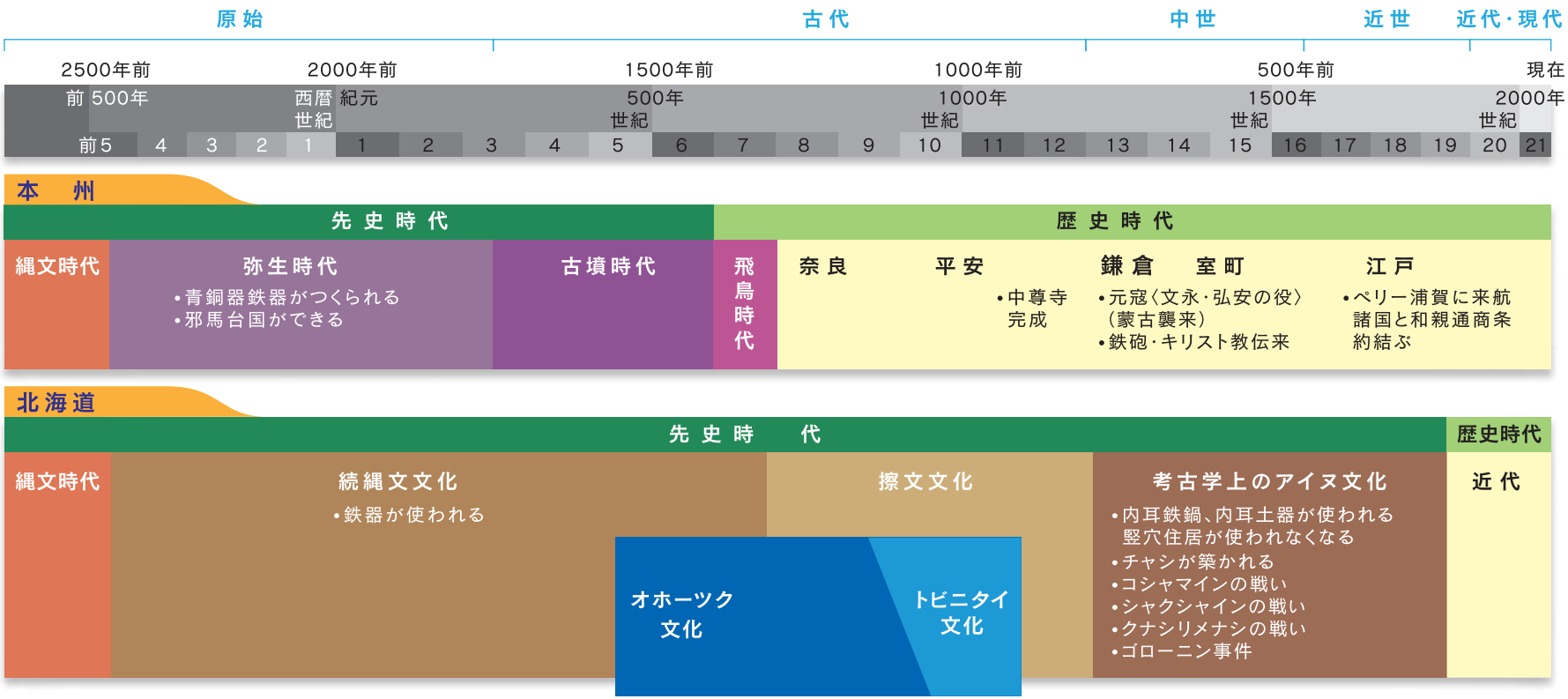
オホーツク文化の地で いまを生きる人へ

オホーツク文化が広く全国で理解されるよう、地元の方々誰もが語り手になってほしいと思います。残念ながら、パターン化された知識体系の下で行われる現在の学校教育で、地方史は重視されません。しかし、それでは知識は増えても、人をつくる情操が育ちません。わたしたちに大事なのは知識の有無より心のありかたです。そのためには、自分が生活している場所を深く知ること、一人ひとりの生活環境を歴史的視点から知ることが欠かせません。道東の方々にとってオホーツク文化はその手がかりです。親しみ、精神性に触れ、日本の誇るべきもう一つの古代文明として伝え続けてほしいと思います。

独自性を再確認
北海道の時代区分

「縄文」には「続」があり、
「弥生」はなく、聞き慣れない「オホーツク」
「トビニタイ」「擦文（さつもん）」、そして「アイヌ」が記される。
大和朝廷史観とは異なる北海道の歴史は、
時に、道内外からの来訪者に新鮮な驚きをもたらします。

◎年代と時代、考古学上の文化対比



ここだけの古代

日本列島各地で1万年以上続いたとされる縄文文化に水稲と金属器をもたらし取って代わった弥生文化は、九州から北上するも、津軽海峡を越えることはついぞありませんでした。代わりに北海道では「続縄文」「擦文」という独自の歴史が刻まれていきます。さらに、オホーツク沿岸では北の海を渡ってきた人々がオリジナリティあふれる文化の花を咲かせました。

当時、世界では

5世紀から9世紀にかけて、北海道のオホーツク沿岸で展開された独自の文化が「オホーツク文化」です。当時気候は地球規模での温暖期だったといわれます。欧州は部族ごとに国がおこった中世ヨーロッパの始まり、中国は南北朝・隋・唐と日本との交流が盛んになった時代、朝鮮半島は高句麗・百済・新羅の3国並列の期間にあたります。

海上を自由に駆けた海洋民族

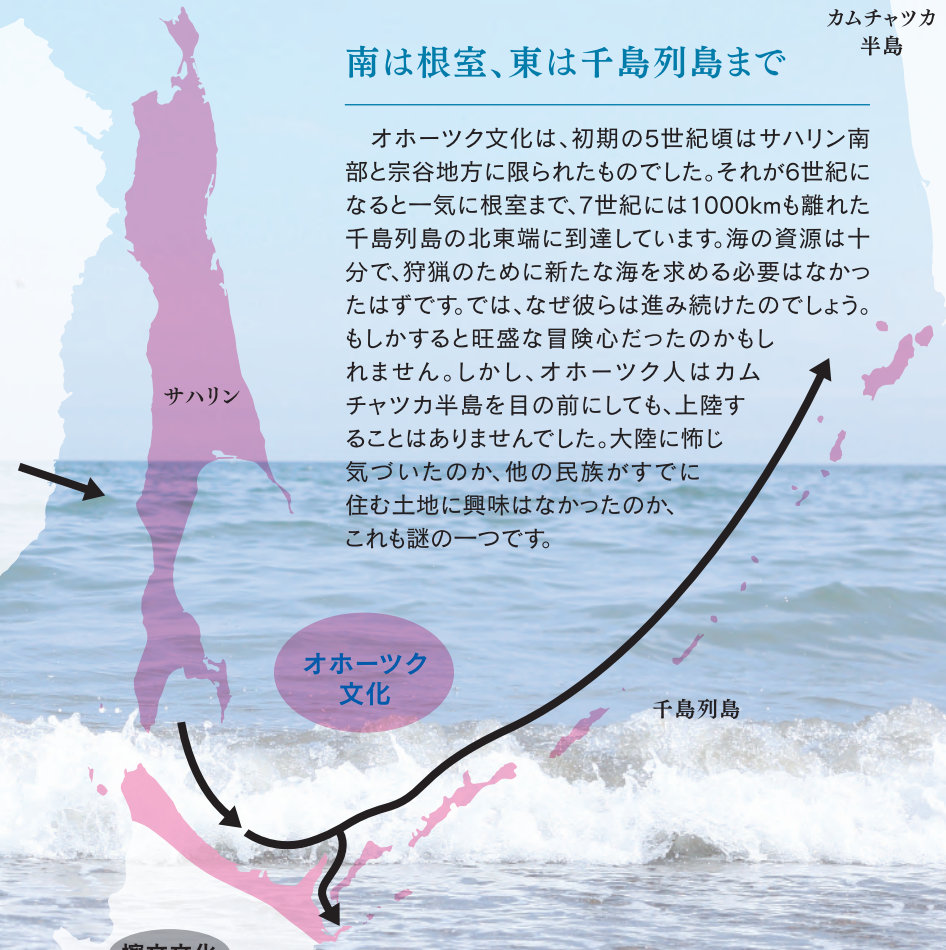
根室海峡

彼らは、どこから来たのか

サハリン南部から北海道のオホーツク海沿岸に展開された「オホーツク文化」の最大の特徴は海洋適応です。海沿いに残されたオホーツク文化独特の大きな竪穴式住居跡は、内陸には存在せず、その立地からも海との深い結びつきがわかります。オホーツク人は海獣狩猟を主に行い、船を操って北海道東岸を南下しました。

オホーツク文化はミステリアスな文化です。最大の謎はそのルーツ。サハリンから北海道へ渡って来たことはわかっていますが、その前段階には諸説あります。大陸からの渡来者によって形成された文化と推測され、なかでもアムール河（黒龍江）流域にルーツを求める説が有力視されていますが、交易があったことを示す以上の根拠となるものは、いまだ確認されていません。

男性の平均身長は160cmほど、顔が大きく鼻が低い、擦文人ともアイヌ民族とも違う顔つきだったという彼らはどこから来たのか。まだまだ地図を見ながら想像する楽しみが残っています。



南は根室、東は千島列島まで

オホーツク文化は、初期の5世紀頃はサハリン南部と宗谷地方に限られたものでした。それが6世紀になると一気に根室まで、7世紀には1000kmも離れた千島列島の北東端に到達しています。海の資源は十分で、狩猟のために新たな海を求める必要はなかったはずです。では、なぜ彼らは進み続けたのでしょう。もしかすると旺盛な冒険心だったのかもしれません。しかし、オホーツク人はカムチャツカ半島を目の前にしても、上陸することはありませんでした。大陸に怖じ気づいたのか、他の民族がすでに住む土地に興味はなかったのか、これも謎の一つです。

根室、標津、羅臼を一回りして謎に迫ろう！

・オホーツク文化の時期区分

		この時代の特徴は
プレ期	5世紀以前	
オホーツク文化前期	5世紀～8世紀	根室で！
オホーツク文化後期	7世紀中～9世紀	羅臼、根室で！
トビニタイ期	9世紀末～12世紀	標津、羅臼で！

住まい

住居の外観や形状は、柱の跡や材質を手がかりに再現したものです。人々の服装も遺物がないことから他国の北方民族を参考に、シンプルなものとしています。実は、とてもおしゃれなデザインだった可能性もあります。

住居模型（羅臼町郷土資料館）

海沿い、それも崖際に住まいを構えることが多かったオホーツク人。海から離れないその暮らしを想像してみましょう。

住まいは竪穴、22畳大

オホーツク人は、海沿い、しかも周囲から孤立し、大海原を眺望する崖の上や小さな島に好んで住みました。住まいは大型の竪穴式、床面積は平均でも約73㎡と現在の3LDKマンション並みです。擦文など他の文化では見られない拡張や建て替えでの竪穴の再利用も見られるのは、限られた場所に大きな住居を建てたからでしょうか。

一つの住居には複数の家族、15人ほどが住めたようです。寝食と狩猟を共にする単位だったとも考えられます。では、集落の規模はというと、根室エリアでは平均5、6棟と推測されます。1軒だけぽつんと建てられたケースもあります。海の向こうへ活発に進出した彼らに、何世代にもわたって定住し集落を発展させるという発想はなかったようです。

根室港に浮かぶ弁天島には6～9世紀、オホーツク文化の最盛期にずっと人が住んでいました。北方四島や千島列島への拡散の拠点だったと考えられます。

動物の骨を積んだ祭祀的空間、骨塚も

オホーツク文化の竪穴式住居の特徴は五角形か六角形であることと、同時代の擦文文化の住居の約3倍という広さです。これまでわかっている最大のものは根室市オンネモト遺跡の134.5㎡、40坪ほどです。広間のようなワンルームの床面の中央に炉を設け、炉のそばは作業場とし、それを囲むようにコの字形に粘土を貼って土間としました。土間と壁の間は板を敷き詰めた板の間で、寝床としたようです。一番奥にはクマや海獣類の骨を祭壇のように組み上げた骨塚があります。動物の利用後は単に廃棄するのではなく、何らかの動物儀礼が行われたと考えられます。

弁天島貝塚竪穴群9号住居跡

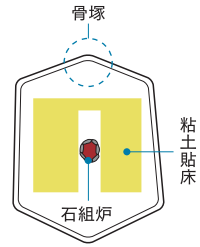
	オホーツク文化期	トビニタイ文化期	擦文文化期
平面形	五～六角形	角の丸い四角形、五～六角形	角の丸い四角形
規模	大型（1辺10～15m）	小型（1辺5～8m）	小型（1辺5～8m）
炉	石組み炉	石組み炉、地床炉	地床炉
かまど	なし	有無混在	あり
貼り床	あり	なし	なし
骨塚	あり	なし	なし

1 トーサムポロ湖周辺竪穴群

根室市豊里／オホーツク文化期のものを含め、湖周辺の海岸段丘上に1500以上の竪穴式住居跡が残る。

各時期の居住形態

オホーツク文化期

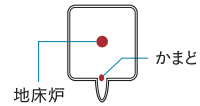


住居形態

オホーツク文化と同時期の擦文文化では住居の広さはオホーツク文化の約3分の1、四角形で多くが壁ぎわにかまどを持ちます。オホーツク文化後期に擦文文化と融合して生まれたトビニタイ文化では、両者が融合され、オホーツク文化の骨塚や粘土の貼り床はなくなっています。

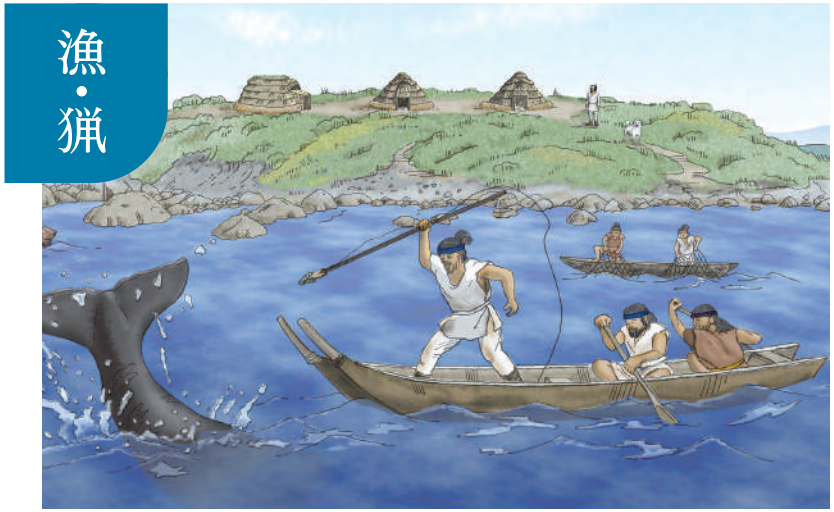
トビニタイ文化期

擦文文化期



海上を自由に駆けた海洋民族

漁・猟



海で漁をするオホーツク人の様子

海を知り尽くしたオホーツク人は
資源の圧倒的な豊かさを享受する術を身につけていました。

クジラも狙う海獣狩猟

オホーツク人の生業は猟と漁が中心でした。クマやシカ、キツネ、クロテンといった陸上動物、アホウドリなど鳥類も捕りましたが、狩人としての真価が発揮されたのは、やはり海の上です。主にアザラシ、オットセイ、そして時にはクジラも狙いました。根室市弁天島で見つかった針入れ（p19）にその様子が描かれています。身ひとつで海に乗り出し、どんなコンビネーションを組んで猟に臨んだのでしょう。大型海獣を狩る技術も、それを支える用具も、洗練されたものだったはずです。

魚は、カレイやニシン、タラなどの網漁が行われていました。私たちにも馴染み深い魚種がほとんどですが、今よりも海水温が高かったため貝塚からはマグロやスズキの骨も見つかっています。また、イヌやブタが家畜として飼われていたこともわかっています。

動物は食料、素材、交易品に

命をかけて手に入れた動物は、その肉は食料に、残った骨は釣り針や銛先などの道具に、毛皮や羽毛は衣服や交易品にと無駄なく使われました。

動物の骨や牙を猟や漁の道具に加工するには、鉄製品と石器が併用されました。鉄をはじめとする金属品は他の文化から手に入れるしかない非常に貴重なものでしたから、粗く削った後は石を使い磨くように細かな細工をしたと思われます。

金属を手に入れたルートの一つは北から。アムール川流域を中心に広がっていた靺鞨（まっかつ）系の文化からです。靺鞨系集団は、自分たちの製品と交換したオホーツク人の毛皮などを、当時盛んに行っていた唐への朝貢の品に加えていたかもしれません。もう一つは南から。擦文人を介して東北から入手するルートです。ここでもオホーツク人の毛皮などが擦文人に渡り、太平洋側の陸奥の国府・多賀城にもたらされたと想像できます。

移動に、狩猟に、どんな船を使った？

出土品から推測されるのは、複数タイプの船があったことです。私たちが乗用車、トラック、バスと用途に合わせて車を乗り分けるように、目的により使い分けていたのでしょう。

注目は、羅臼町松法川北岸で発見された船の木製模型の形です。縄文文化期から日本各地で長い間使用されていた丸木舟とは形状が違い、底面が平坦です。より安定性の高い、構造船に近いものだった可能性があります。

木製船と櫂（松法川北岸遺跡）

※構　造　船：骨組みと板材で建造された船。
準構造船：丸木舟の上部に板を継ぎ足して容量を増やした船。
丸　木　舟：1本の木をくり抜いた舟。

2 オタフク岩洞穴遺跡

羅臼町松法町／海岸段丘の中段に南に開口部を向けた奥行き5m程の洞窟。10個体以上のクマの頭骨が整然と並べられ、トビニタイ期直後の擦文期の熊送りを知る上で貴重。

土器

「オホーツク文化」の呼び名は
縄文や弥生と同様、「オホーツク土器」から。
土器は、時代・地域・集団を色濃く映す
先史時代を知るための大切なものさしです。

明治には発見されていた

オホーツク土器は、1878年（明治11）政府のお雇い外国人、火山地震学者ジョン・ミルンが千島列島に向かう途中で根室の弁天島を調査した際に発掘されていました。当時はまだ、オホーツク文化そのものが認識されていませんでしたが、縄文とは違う文様の土器の存在は研究者の注目を集めました。大正になるとモヨロ貝塚が発見され、調査が進むにつれてオホーツク沿岸に独特の文化があったことが徐々に明らかに。そして1933年（昭和8）、一帯で発掘された土器は「オホーツク土器」と命名、「オホーツク文化」の名称も一般化していきました。

刻文（こくもん）土器
<7世紀ころ>

貼付文（はりつけもん）土器
<8～9世紀ころ>

文様にも流行が？

オホーツク土器はマイナーチェンジを重ねていました。

初期、5～6世紀は「刺突文（しとつもん）」。口縁部に棒などで突き刺した穴が特徴です。樺太（サハリン）の十和田で初めて出土したことから「十和田式」と呼ばれます。分布の中心は宗谷以北ですが、根室市の弁天島でも見つかっています。

7世紀になると棒やヘラ状の工具で文様を刻みつけた「刻文（こくもん）」、先の細い工具で線をめぐらす「沈線文（ちんせんもん）」が登場します。サハリンから北海道東岸、北千島でも多く出土することから、最も活発に活動圏を広げた時期とされています。

8世紀になると、うどん状の粘土ひもを口縁部にめぐらして刻みをつけたり、ソーメン状の細い粘土ひもをめぐらした、オホーツク文化で最も特徴的とされる「貼付文（はりつけもん）」が登場します。貼付文で鳥を表現したり、注ぎ口や取っ手が付いたりと、装飾性も高くなりました。

刺突文（しとつもん）土器
<6世紀ころ>

3 北海道松法川北岸遺跡出土品（重要文化財）

羅臼町郷土資料館で公開。7～8世紀頃のオホーツク文化期の集落跡より出土した260点が重要文化財指定。火災にあった住居跡から炭化した木製品が多数出土。

見分けてみよう

狩猟や採取で得たものを生食するか焼いて食べるか、この2択に「煮る」という調理法を加えた土器。植物や木の実も軟らかく、アク抜きして食べられるようになり食に多様性をもたらした画期的な発明です。土器の形態・文様は、そのまま文化の違い。文様の種類だけでも言い当てられると、出土品の観察もがぜん楽しさを増します。

オホーツク土器
（松法川北岸遺跡、8世紀頃）

1万5000年前に始まったとされる縄文文化以来、人類の歴史のものさしで見ればつい最近の800年ほど前まで、土器はずっと利用されてきました。調理用、貯蔵用、食器、祭事用、各地で様々な用途が想定される土器が出土していますが、ここでは根室エリアで先人たちが主に煮炊きに使用していたと思われる土器を紹介します。前ページのオホーツク土器と比べながら基本知識を得たら、ぜひ博物館に足を運んでください。

4 温根元竪穴群

根室市温根元／8～9世紀頃のオホーツク文化期の竪穴住居跡が、現在の民家の近くに残る。住居の長さは最大級の14.6m。牙製婦人像、金属製の針が入った針入れが出土。

縄文土器

穂香竪穴群
4～4.5千年前

写真提供：北海道立　埋蔵文化財センター

- 世界で初めて土器を生み出したのが縄文文化といわれる。土器の王様。
- 植物繊維を撚（よ）った縄を器の表面に押し付けたり転がして付けた文様。
- 根室市では約4000年前（縄文時代中期末～後期前半）の動物意匠（クマの顔）付き土器が出土。

擦文土器

伊茶仁カリカリウス遺跡
12世紀頃

- 本州の影響を受けた土師器（はじき/古墳時代。文様はほとんどない。埴輪は土師器の一種）の影響を受けた土器。
- かまどに合うよう、底部が細い形。
- オホーツク土器にも見られる沈線文が見られる。後期は、木のヘラでこすって表面を仕上げた。

トビニタイ土器

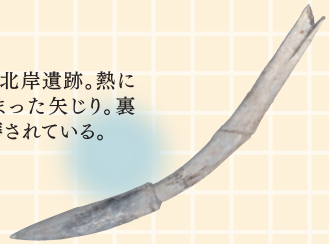
オタフク岩遺跡
9～10世紀頃

- 形は擦文文化、文様はオホーツク文化のハイブリッド。
- オホーツク文化の特徴・貼付文を残しつつ擦文文化の沈線文を施したものも。
- 後期には貼付文はほとんどなくなる。

かわいいも、機能性も

石・骨・木を使った道具

オホーツク文化では、鉄製ナイフを使って海獣の骨や歯、鳥類の骨などから狩猟や漁の道具、装身具や彫刻品を作りました。羅臼町・松法川北岸からは、原型をとどめたまま木炭状で残っていた木製品も出土しています。どれも洗練された加工品。動物意匠からは愛情も感じられます。



骨鏃（こつぞく）
羅臼町・松法川北岸遺跡。熱により湾曲してしまった矢じり。裏面は平坦に研磨されている。

牙製婦人像（がせいふじんぞう）
根室市・温根元竪穴群、マッコウクジラの歯牙、高さ6.5cm。牙製婦人像はオホーツク文化特有のもの。全道で十数例あるうち道東はすべてに頭部がない。最初から頭部を欠いて作られたよう。

動物意匠土製品＜カエル＞
羅臼町・松法川北岸遺跡、長さ3.8cm。土器の取っ手部分の破片と思われる。

熊頭木鎖（くまがしらもくさ）
羅臼町・松法川北岸遺跡、顔面長2.3cm。クマの顔からつながる鎖の一部。樺太アイヌの1本の木から鎖を彫る技術と同じ技術。

砥石（といし）
羅臼町・松法川北岸遺跡、左の長さ8.7cm。穴のある砥石はオホーツク文化の特徴。携帯用と思われる。

動物意匠骨器＜ラッコ＞
根室市・幌筵島出土。ペンダントヘッドと思われる。素材歯牙製。

動物意匠土製品＜シャチ＞
羅臼町・松法川北岸遺跡、長さ10.9cm。土器とは異なる粘土で作られている。

熊頭注口木製槽（くまがしらちゅうこうもくせいそう）
羅臼町・松法川北岸遺跡、全長60cm。住居内の骨塚近くから出土。アイヌ文化のシャチの背びれの図案と酷似した彫り込みがあり、海の神シャチと山の神クマを合わせた祭祀の道具と考えられている。通常は伏せて置くように作られている。

動物意匠骨器＜アザラシ＞
根室市・温根元竪穴群、長さ6.2cm。垂飾。穴にひもを通しアクセサリーとして利用されたのだろう。海獣骨製。

実寸!

動物意匠骨器＜キツネ＞
根室市・温根元竪穴群、長さ2.4cm。器用な手仕事がひときわ光る。歯牙製。

動物意匠骨器＜フクロウ＞
根室市・温根元竪穴群、フクロウ高さ4cm。海獣骨製。

針入（はりいれ）
根室市・弁天島貝塚竪穴群、8~9世紀頃、アホウドリ類の骨、長さ8.3cm。7人が船に乗り、1人が銛を構えている。クジラに刺さった4本の銛のうち2本はロープで船とつながる。

［復元模型］

樹皮製容器
羅臼町・松法川北岸遺跡。炭化したものが出土。白樺の皮で作る容器は北方民族に共通して見られる。

［復元模型］

5 弁天島貝塚竪穴群

根室市弁天島／6～9世紀頃のオホーツク文化期の竪穴住居跡が14軒確認される。北構保男氏が13歳の時、捕鯨彫刻図が線刻された針入れを発掘。

上空から見た標津遺跡群（点線部分）

擦文文化との遭遇
トビニタイ文化誕生

8世紀後半から9世紀、オホーツク文化は擦文文化と出会い、大きく変容。羅臼・標津を中心に新たな文化を生み出しました。

オホーツク人の選択

オホーツク文化は、道央・道南をはじめ広く道内をカバーしていた擦文文化と出会いました。この出会いに衝突や戦いの痕跡はなく、互いに影響し合って形成されたのが標津、羅臼、北方四島を中心に開花したトビニタイ文化です。「トビニタイ」は、双方の特徴をもつ土器が初めて発見された羅臼町のアイヌ語地名で「飛仁帯」の字があてられます。

主な交易先だった大陸とのつながりが希薄になったオホーツク人にとって、擦文人がもつ本州とのネットワークは大きな魅力だったでしょう。擦文人との交流は鉄も豊富にもたらしました。トビニタイ文化は、オホーツク文化がはるかに大きな集団である擦文文化に吸収される過程ともいわれますが、オホーツク人は自らの選択で、積極的に自らの文化を変容させたのかもしれません。

変化したライフスタイル

トビニタイ土器

海の民・オホーツク人はついに海岸から離れて住むようになりました。クジラやアザラシなど海獣狩猟を主体とした暮らしから、サケ、マス漁を主体とした擦文スタイルへ、劇的な変化です。トビニタイ文化は、サケが遡上する河口から川沿いに数十キロ内陸にまで広がりました。縄文文化から1万年もの間サケと共に人が住み続けた標津町では、トビニタイ文化期もサケ利用に特化した生活が営まれました。ただ、サケのみで1年間暮らすとは考えにくいため、サケ漁ができる場所に定住しつつ、サケ漁以外の季節は他の場所に移っていたとも考えられています。

オホーツク文化の特徴だった大人数が住む大型住居は姿を消しました。住居はオホーツク文化の石組み炉を残しつつ擦文サイズに小型化（p12）、擦文文化の形を採用した土器にはオホーツク文化の典型的な文様が施されました（p17-18）。

カリカリウス遺跡　復元住居

根室管内4市町「鮭の聖地」が「日本遺産」に認定

鮭をテーマに、古代から続く人との関わり、産業、食文化を組み合わせ、根室市、別海町、標津町、羅臼町の遺跡、産業遺産などで構成される「『鮭の聖地』の物語～根室海峡一万年の道程～」が2020年度、文化庁「日本遺産」に認定されました。全国の認定数は104件、道内では5件目です。（※日本遺産は当面、新たな認定は行いません）

6 伊茶仁カリカリウス遺跡（国指定史跡）

標津町伊茶仁／ポー川史跡自然公園内。1遺跡としては国内最大の2549カ所の竪穴住居跡である窪みが確認される。約1万年間ほぼ途切れることなく人々が住み続けた証し。

鮭の天日干しをする様子（標津町ポー川史跡自然公園ジオラマより）

受容と発信
文化がダイナミックに動き出す

道東で生まれたトビニタイ文化は
そのネットワークに乗せて
全道各地に確かな足跡を残しました。

変えたライフスタイル

現代のような通信・交通網がない古代でも、各地で栄えた文化は自給自足を基本としながらも自己完結型社会ではなく、地理的条件を克服して交易を活発に行う開かれた社会でした。トビニタイ文化も、主に太平洋側の擦文文化のグループを介して東北、本州につながる広大なネットワークを持っていたと思われます。もしかすると、平泉の奥州藤原氏が力をつけていく過程で、トビニタイのグループがもたらす産物が支えになっていたかもしれません。そう考えると日本史の見方に新たな視点が加わり、違った面白さが見えてくるのではないでしょうか。

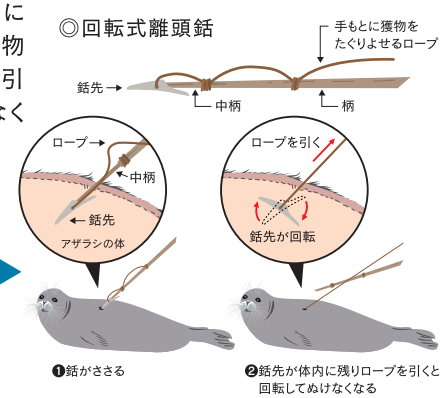
道東発、全道に伝わった漁具

和人の視点からは文化的な流れを本州から北海道南部へ、そこから北海道各地へと思い描きがちです。しかし、文化の交流は双方向、道東から全道へと伝わったものもあります。トビニタイ文化は、オホーツク文化の特徴、特に熊送りに見られる動物儀礼の精神性や狩猟技術を、広く北海道各地へ伝え、後世に残す橋渡し役をしたといえます。

例えば、アイヌ民族が海獣狩猟に使用した銛頭の「キテ」。これは獲物に突き刺した後、付けたロープを引くと銛先が体内で回転して抜けなくなる、回転式離頭銛と呼ばれる仕組みの狩猟具です。ロープを引っ張れば容易に獲物を回収できます。この仕組み自体は、古くは縄文時代から日本列島各地で用いられてきましたが、「キテ」と同様、強固にロープを繋留できる構造はオホーツク文化のものが最古であり、トビニタイ文化を介して、12世紀以降、全道にその技術が広まったと考えられています。

銛先（キテ）

◎回転式離頭銛



伊茶仁カリカリウス遺跡

7 トビニタイ遺跡

羅臼町海岸町／ハシコイ川河口の狭い沖積地に23の竪穴住居跡が見つかり、トビニタイ文化発見のきっかけとなった遺跡。「トビニタイ」はこのあたりのアイヌ語地名（飛仁帯）。

熊送りの跡（オタフク岩洞穴）

そして、彼らはどこへ？

オホーツク文化は擦文文化に完全に取り込まれ消滅したとされます。しかし、北海道の文化、人に、彼らの存在の証しが確かに刻まれていました。

イオマンテに見られるオホーツク文化のなごり

オホーツク文化の動物儀礼は、トビニタイ文化を介して全道の擦文文化へ、そしてアイヌ文化へ伝えられたと考えられます。アイヌ民族のイオマンテ（飼育型クマ送り）の起源も擦文文化、トビニタイ文化に見ることができます。

熊送りの儀式は東アジアの他地域にも見られますが、北海道の熊送りがそれらと大きく異なる点は、成獣ではなく子グマを使うことです。アイヌ民族は冬眠中のヒグマを狙い、母グマはその場で殺し、子グマを連れ帰って二冬育てた後で神の国に送り返します。羅臼町オタフク岩遺跡からは、これを裏付けるように狩猟の場で母グマだけを殺し送った跡が見つかっています。また、熊送りに使うクマの頭蓋骨に処理用に開ける穴の位置がオスは左、メスが右である点も、アイヌ民族との共通点です。

DNAに刻まれた、アイヌ民族形成へのかかわり

写真提供：公益財団法人アイヌ民族文化財団

どこか北の方から来て、300〜400年の間活発に活動し、またどこかに消えてしまったという謎に包まれたオホーツク人。その起源は解明されていませんが、最後は、消えてしまったわけではありませんでした。

オホーツク人の遺伝子が解読され、縄文人 ― 続縄文人 ― 擦文人の流れをくむとされてきたアイヌ民族の成り立ちに関わったオホーツク人の集団があることがわかったのです。トビニタイ文化期にオホーツク人と擦文人の婚姻が進んだ結果と考えるのが自然です。アイヌ民族の中でも畏敬の念を込めて「アイヌの中のアイヌ」と呼ばれる、道東「メナシ・アイヌ」の形成にはオホーツク人が関わっていたと思われます。

アイヌ民族儀式イオマンテ（熊送り）　写真提供：公益財団法人アイヌ民族文化財団

「もう一つの日本列島史」の空白を埋める

オホーツク文化の謎が徐々に解かれていくことで、記録に残されていない時代の歴史の空白が少しずつ埋められていきます。丁寧にその足跡を追う作業は、多様性に基づくステレオタイプではない新たなアイヌ文化像を創るきっかけになるかもしれません。

道東で「もう一つの日本列島史」を鮮烈に彩ったオホーツク文化の人々は、この地を踏み、この地で食べ、眠り、語り合いました。彼らが、同じ景色を眺めるいまのわたしたちを見たとしたら、何を思うのでしょうか。

学芸員に聞く オホーツク文化の魅力と価値

根室市 歴史と自然の資料館

学芸主査

猪熊　樹人【いのくま しげと】

出身地：宮崎県延岡市
着任時期：2005年（平成17）

専門 海の考古学

「生まれは九州で、愛知県で考古学を学び、北海道で就職をしました。そうしたこともあり、各地の遺跡や遺物を見る機会に恵まれ、日本列島の先史・古代文化の多様性を実感します」

根室市の代表的なオホーツク文化遺跡として弁天島貝塚竪穴群がある。この遺跡では、6～9世紀頃のオホーツク文化期の竪穴住居跡が14軒発見されているが、明治時代初期にブラキストン線を提唱したトーマス・ブラキストンが発見し、1878年（明治11）に地震学者ジョン・ミルンが発掘した。また、根室在住の考古学者である北構保男氏（1918-2020）は、約90年にわたり、根室市を中心に北方四島や北千島におけるオホーツク文化の解明に力を注いだ。こうした先学の研究があり、この地域のオホーツク文化の内容がわかってきた。根室地方のオホーツク人は、北方四島や千島列島の北部まで居住域を拡大させた担い手だったと考えており、文化の広がりを考える上で根室地方の遺跡は特に重要である。北方四島が指呼の位置にあるこの地域で、根室海峡を行き来したであろうオホーツク人の暮らしぶりを遺跡や遺物を通して実感して頂ければと思う。

標津町 ポー川史跡自然公園

主幹学芸員

小野　哲也【おの てつや】

出身地：東京都八王子市
着任時期：2009年（平成21）

専門 アイヌ考古学

「江戸時代に白糠まで到達して力尽きた八王子千人同心の後をたどり、平成の八王子千人同心として北海道最東の地の発展の一助となるため標津にやってきました」

いまから30年前、アイヌの歴史の内、中世に相当する時期は歴史のミッシングリンクとも呼ばれ、全く未解明の領域であった。しかしこの20年程の間に、主に北海道南西部では、従来の学説を再考するような新たな発見が相次ぎ、徐々に歴史の溝が埋められようとしている。そしていま、自身の中でアイヌ文化形成史上の最大の関心事は、アイヌ文化とオホーツク文化の関係を明らかにすることである。標津遺跡群を中心とした根室海峡沿岸の竪穴群は、その謎を解明できる可能性で溢れている。故北構さんの頃から、根室地域の考古学は大学などの研究機関主導ではない、地域主導の研究が進められてきた。自分は北構さんを第一世代とすれば、第三～第四世代の考古学徒であろうが、地域密着型の研究精神に倣いながら、学術上の課題解決に臨んでいきたい。

羅臼町 郷土資料館

学芸員文化財保護係長

天方　博章【あまがた ひろあき】

出身地：北海道江別市
着任した時期：2012年（平成24）

専門 北海道考古学

「ハリウッド映画の主人公、世界中の秘境や遺跡を探検する考古学者に憧れ、考古学に興味をもちました。実際の発掘調査に映画のような大冒険はありませんが、やはりワクワク、ドキドキします」

羅臼には国指定重要文化財の北海道松法川北岸遺跡出土品があり、これはオホーツク文化の集落跡出土品の一括である。この出土品は当時の生活の実態を復元する上で、類例のない資料と評価されている。

また、動物を意匠とした製品が多くあり、中でも熊頭注口木製槽はヒグマの頭部が非常に写実的に彫刻されており、オホーツク文化を担った人々にとってヒグマが身近な存在であったことがわかる。そして、容器の縁にはシャチの背びれが彫刻されており、山と海を一体として描くことから当時の精神文化を知ることができる。

現在、羅臼は海と陸がつながる生態系などが評価され世界自然遺産知床に登録されているが、熊頭注口木製槽はこれを象徴するものだと感じている。知床を訪れる際は、このガイドブックを手に、古代の歴史も体感してほしい。

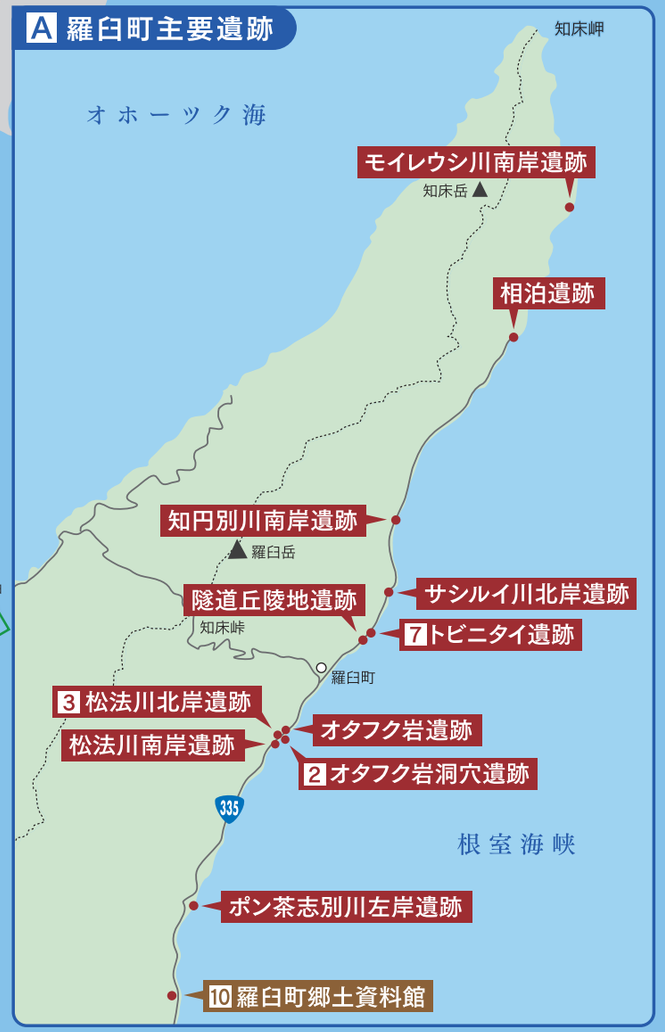
オホーツク文化の主要遺跡マップ

オホーツク海
知床半島
知床岬
知床岳
羅臼岳
知床峠
羅臼
羅臼町
知床斜里
斜里町
海別岳
斜里岳
標津町
標津
標津山
中標津町
中標津
根室海峡
国後島
野付半島
尾岱沼
野付崎
納沙布岬
根室半島
根室
根室市
風蓮湖
ユルリ島
落石岬
花咲線
浜中湾
霧多布岬
浜中
浜中町
厚岸町
厚岸
厚岸湖
厚岸湾
釧路町
尻羽岪
釧路
釧路市
釧路湿原
釧路西IC
釧路東IC
釧路別保IC
たんちょう釧路空港
白糠町
白糠
鶴居
鶴居村
阿寒湖
雄阿寒岳
雌阿寒岳
弟子屈町
摩周湖
摩周
標茶町
標茶
釧網本線
別海町
別海
屈斜路湖
藻琴山
清里町
網走
網走市
網走湖
能取湖
能取岬
女満別空港
知床斜里
湧別
サロマ湖
湧別町
佐呂間町
北見市
北見
留辺蘂
石北本線
訓子府
置戸
訓子府町
津別町
陸別町
陸別
大空町
美幌町
小清水町
根室本線
浦幌
浦幌町
音別
足寄IC
本別IC
浦幌IC
白糠IC
阿寒IC
根室IC
温根沼IC
A
B
C

凡例：
- JR線
- 根室道路
- 道東自動車道
- 釧路外環状道路
- 国道

N

A 羅臼町主要遺跡



B 標津町主要遺跡

C 根室市主要遺跡

オホーツク文化に触れるなら

8 根室市歴史と自然の資料館

住所 根室市花咲港209番地
TEL 0153-25-3661

1942年（昭和17）海軍通信隊の分遣所として建設、戦後は小学校として利用された赤レンガの建物。縄文文化後期の特異な土偶（北海道指定有形文化財）も展示。

9 標津町ポー川史跡自然公園

住所 標津町伊茶仁2784
TEL 0153-82-3674

国指定史跡「伊茶仁カリカリウス遺跡」と国指定天然記念物「標津湿原」からなる630haの広大な保護区域。出土品はビジターセンターに展示されている。

10 羅臼町郷土資料館

住所 羅臼町峯浜町307-1
TEL 0153-88-3850

建物は旧植別小中学校を再活用。松法川北岸遺跡の出土品は重要文化財展示室に展示されている。また、暗所で光る貴重なヒカリゴケの生体展示もある。

協力・写真提供：根室市歴史と自然の資料館、標津町ポー川史跡自然公園、羅臼町郷土資料館、公益財団法人アイヌ民族文化財団

オホーツク土器

2020年11月発行

大地みらい信用金庫
〒087-8650 北海道根室市梅ケ枝町3丁目15番地
TEL (0153) 24-4101

一般財団法人
大地みらい基金
TEL (0153) 24-4104